第7章　ヒトラーはシオニズムをどう見ていたか

ヒトラーのユダヤ人観およびユダヤ人問題観は、『マイン・カンプ〔わが闘争〕』にはっきり表明されている。ヒトラーは随分骨を折って、自らのユダヤ人憎悪が理にかなっていることをデモンストレートし、またそれが経験から導かれたものであり、明白な証拠から引き出された論理的帰結であることを示そうとした。ヒトラーがつねに主張したのは自分の最初の対ユダヤ人観が全く穏健だったということである。「伝統的紳士」タイプの父親のほうは、反セム主義を宗教的偏見の残滓とみなしており、一般に言われてきたようにまだ啓発を受けていた段階のヒトラーもそう見なしていた。母親が死に、リンツ郊外の田舎から大都会のウィーンへ移った後はじめて少年期の屈託ない態度を問い直す機会に遭遇した。ウィーンの旧市街をうろつきまわっているうちにガリツィアのハシディズム信奉のユダヤ人に出くわすことになる。「長いカフタンを着用し黒い頭髪をたばねたユダヤ人が眼前にあらわれた。これもユダヤ人か？　というのが私の最初に考えたことだった。」しかしヒトラーが目にしたものについて問うていけばいくほど彼の問いは新たなかたちをとっていくことになった。「これはドイツ人だろうか？」[1]と。ヒトラーにとって生存の中心問題がいったい何か、何度も反芻した最も初期の問題のこうしたコンテキストがシオニズムを『わが闘争』に書き込む契機となった。

〔ユダヤ人問題は、ある特定の宗派に属するドイツ人の問題ではなく、特定の民族の問題であることを〕なお私が疑っていたとしても、一部のユダヤ人自身の態度によって、最終的にその曖昧な点が取り除かれた。ウィーンではユダヤ人の間でかなり広範囲に展開されていた一大運動が、ユダヤ人の民族性をこの上もなくはっきりと確証した。すなわちシオニズム運動がこれであった。

なるほど、ユダヤ人の一部だけがこの立場に賛成し、大多数はこうした見方の確定を非難し心の中でも拒否しているようにみえた。しかし……いわゆる自由主義的な考え方をするユダヤ人が実際シオニストを拒否するのは、シオニストが非ユダヤ人だからではなく、むしろそのユダヤ民族性に対する、ただ不器用でしかもおそらくは危険な公然たる信仰告白をなすユダヤ人だからであった。[2]

シオニズムの古典的役割が反セム主義の先導者であることを、このヒトラーの言明ほどによく証明したものはない。ヒトラーが『わが闘争』の読者に〔反語的に〕問いかけていたのは、理性的人間に〔この問題の判断をめぐって〕それ以上一体何が必要であろう？　ということであった。しかし、一九一四年〔第一次世界大戦勃発〕以前は、ユダヤ人国家の展望が息を吹き返しながらもまだ遠い将来のように思われており、ヒトラー自身ウィーンでそれ以上シオニズムにかかずらう必要もなかった。ヒトラーにシオニズムの問題を再考させるようになったのは、バルフォア宣言であり、ドイツの敗北、ヴァイマル共和国を生んだ革命であった。当然ながらヒトラーはこの三つの出来事をひとまとめに扱っている。彼によれば、ふた心ある〔ドイツ〕ユダヤ人の、ほんとうのもっともらしさは、バルフォア宣言に対するその歓迎ぶりにあらわになったのであった。そしてドイツ皇帝をその地位からひきずりおろした存在こそ社会民主党であり、彼らはまたユダヤ人の召し使いであった。こうしたやからが存在しなければ、ドイツは戦争に勝っていた